

氏名(本籍)	蒲生 美津子 (東京都)
学位の種類	学術博士
学位記番号	博音第1号
学位授与年月日	昭和57年3月25日
学位授与の要件	学位規則第5条第1項該当 音楽研究科 音楽専攻 音楽学研究領域
学位論文等題目	早歌の音楽的研究
論文等審査委員	(主査) 教授 横道 万里雄 (副査) 教授 服部 幸三 教授 小泉 文夫 助教授 舩山 隆

論文内容の要旨

早歌(そうが)は鎌倉・室町時代に盛んに歌われた声楽である。しかし16世紀初めから急速に衰退し、ついに譜本を残すのみとなった。近年早歌は宴曲とも呼ばれ、吉田東伍、高野辰之等をはじめとする国文学者の間で研究が行なわれてきた。しかし早歌は、たんに詞章を棒読みするものではなく、節まわしをつけて歌われたものであるから、詞章の横に施された墨譜に関する音楽的研究なくしては、早歌の実態を正しく把握したことにはならない。その楽譜の解読を行いつつ、早歌周辺の声曲を比較検討することにより、早歌の音楽構造を実証的に解明し、歌われた実際の姿を復原することを目的としたのが本研究である。

さらに本研究は、早歌に先行する声明・講式などの仏教音楽や、催馬楽、朗詠などの雅楽歌物が、早歌にいかなる影響を与えたか、また早歌に後行する平曲、謡曲などの中世語りものが、早歌からいかなる音楽的要素を受け継いだかを明らかにすることに努めている。と同時に、今日未開拓の研究である、上記のごとき諸声曲の生成時期の実態を復原する場合の方法論をも提示している。すなわちこの論文は、早歌そのものの実態を解明し、早歌を中世芸能史上に正しく位置づけるとともに、中世諸芸能の実態と変遷を解明する一つの可能性を実証する学術的意義をもつ論文でもある。

早歌の譜本は200冊あまり伝存するが、そのうち室町時代に視唱本、相伝本として実用された譜本が30冊前後ある。それらの譜本の墨譜を比較対照すると、同じ曲は大体同じ節付けになっているので、早歌は個人個人が勝手気ままに歌ったものではなく、ある一定の様式に基づいて歌われた声楽であることが分る。この論文で、譜本の墨譜によって解明された早歌の音楽構造は次のようなものである。

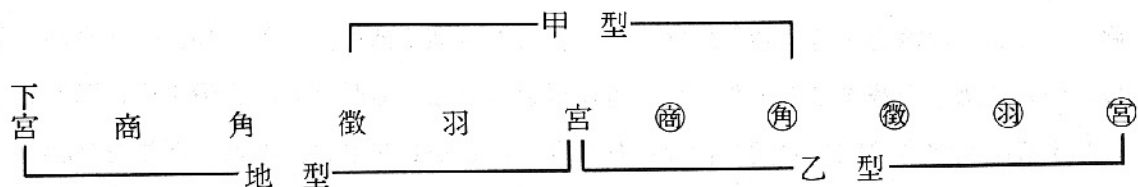
1. 拍節的リズムを基礎とし、シラビックに歌われる。シラビックな点は講式を受け継ぎ、拍節的な点は謡曲にとり入れられた。
2. 音域は2オクターヴに及び、低い方から下宮、商、角、徵、羽、宮、**商**、**角**、**徵**、**羽**、**宮**の11種の階名で音位が示される。(墨書きの五音を宮、商、角……、朱書きの五音を**商**、**角**、**徵**……とし、以下これにしたがう。)
3. 早歌の旋律には、地型・甲型・乙型という3つの曲節型があり、普通1曲の中で3種あるいは2種を折りまぜる。これらは講式の初重・二重・三重に擬することが可能である。すなわち次のような対応関係が認められる。

地型＝初重

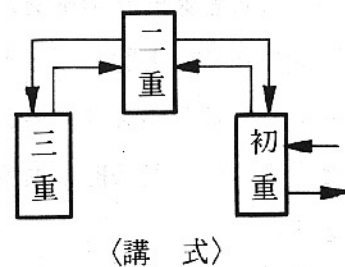
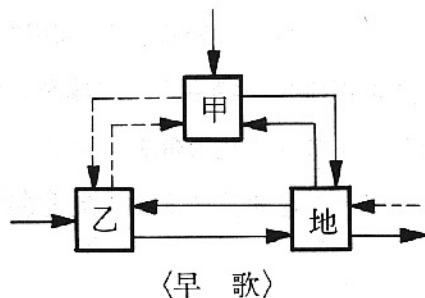
甲型＝二重

乙型＝三重

4. これら3種の曲節型は2オクターヴにおさめられる。地型は下宮からその1オクターヴ上の宮まで、乙型は宮からその1オクターヴ上の**宮**までで、地型と乙型は宮を接点として隣り合う。甲型はその接点の宮を真中として、**徵**から**角**までの音域である。



5. 曲節型の接続は、乙→地、甲→地、地→甲、地→乙というのが原則であるが、稀に乙→甲、甲→乙も存在する。なお講式のごとく、地型(＝初重)から開始するものは初期の曲に限られ、曲数も少ない。甲型、乙型から始まるものの方が多い。曲の冒頭に記載される曲頭記は、その曲がどの曲節型によって開始されるかを教えている。それによると、甲曲……59曲、乙曲……77曲、地曲……14曲を数える。残り11曲は譜本により異同のあるものである。

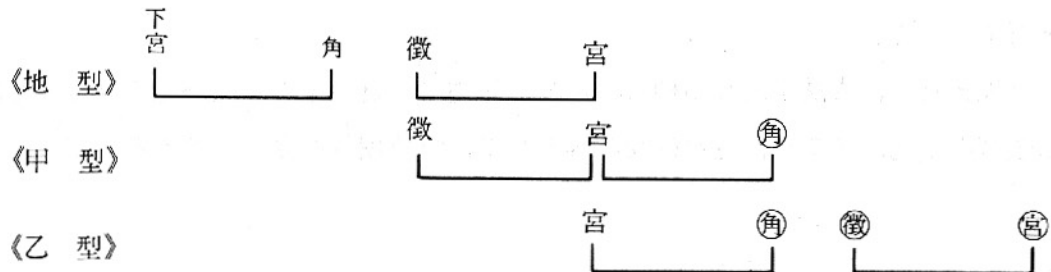


6. 曲の途中で曲節型が変わる場合、乙型への転換は右カギ(へ)、甲型への転換は左カギ(ゝ)で示される。それに対し、地型への転換は直接的には示されない。
7. 詞章の一語一語に対する節付けは、20余種のハカセと、それに注記された五音で示される。それらの運用には法則性があるので、一定の旋律型が存在することが認められる。詞章の七五調一句で旋律型の単位となっており、それによると旋律型の種類はかなり多く、その組み合わせ

せも変化に豊んでいることが分る。旋律型の種類は地型がもっとも多く、乙型がそれに継ぎ、甲型がもっとも少ない。地型と乙型にはオクターヴ関係にある旋律型が少なくない。

8. 個々の旋律型については、上ノ句部分では多様であり、下ノ句部分では類型的であると言える。旋律は上ノ句は上行形、下ノ句は持続音となるものが多い。

9. 旋律構成音は核音と付加音の区別が認められる。旋律はテトラコルド構造になっており、各曲節型は次のような構造である。



なおこの構造は、角と⊙が律角であるという考証のもとに行なっている。

10. 各曲節型の上方のテトラコルドでは、上行の際は上の核音まで順次進行し、下行の際は中間音を経由せずに下の核音に下行するのが典型である。下方のテトラコルドでは、上行形・下行形ともに中間音をとらない。

11. 上ノ句における上行形の順次進行は民謡音階であると認められる。全体として早歌の音階は、講式、平曲、謡曲など中世起源の声楽の構造と共通するものと推定される。